みやこ町歴史民俗博物館

博物館だより

MIYAKO TOWN DIGITAL MUSEUM
www.miyako-museum.jp

No.195

令和５年２月１日

みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
ＴＥＬ０９３０－３３－４６６６
ＦＡＸ０９３０－３３－４６６７

博物館休館日カレンダー 2023年 2月

日	月	火	水	木	金	土
29	30	31	1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	1	2	3	4

□ 休館日 ※情報はR5.1.21現在

◆博物館「おススメ」逸品レポート
この展示（＆収蔵資料）

ココが見どころ、ここがツボ!!

コロナであってもなくても博物館の魅力は収蔵資料が持つ多彩な価値と情報です。当館には町の豊かな歴史と文化が育んだ沢山の「逸品」資料があり、以下にその一部をご紹介いたします。

▲書簡群の全容 小宮の妻あて通信には心からの慰めと労りの言葉が細密文字でびっしりと並ぶ

●資料名
関東大震災関連書簡群　1式
＊現品は小宮豊隆資料（追加分）の一部
＊令和4年度現在整理作業中の資料となるもの

●データファイル
- **法　量　等**：全11点（封書4通・絵ハガキ2組・写真5枚）
- **制作年代**：大正12（一九二三）年前後
- **ポイント**：当事者間の通信に加え震災絵ハガキや直接撮影の被災写真等貴重な震災記録
- **公開状況**：保存のため通常非公開

▲絵ハガキに記された家族からの震災レポート
左：被災後の銀座／右：妻と子供の近況報告

●資料解説＆メモ

今年は歴史に残る大災害・関東大震災から百年目を迎えます。改めて防災への取組が各地・各分野で進む一方、時を超えて災害時の対応についての教訓を得るべく、百年前の震災記録の発掘・データ化や分析が進められています。当館にもこの目的に叶う情報を含んだ資料があるのですが、それは当町出身で夏目漱石最愛の弟子として知られる小宮豊隆ゆかりの資料です。

小宮は大正12年、文学修養のため2年に亘って欧州へ留学しますが、その只中の同年9月1日、留守中の家族を大震災が襲ったのです。

SNSは勿論、テレビ・ラジオもない当時、在外邦人と日本の被災家族が連絡を取ることは至難で、断片的な情報が錯綜する中、小宮も家族も不安の極みで日々を過ごしました。漸く家族の無事が確認できたのは9月20日で、留守を守る妻の恒子（つねこ）が打った「ミナブジツネ」の電報でした。これを手にした小宮は大粒の涙を流して歓び、早速妻へ労りと励ましの手紙を書き、以後小宮夫妻の絆は不動のものになったとのことです。

災害時に「正確な情報」と「絆」が欠かせないということを如実に身近に物語る貴重な資料です。

◆講座・教室・催し物ガイド

2月の歴史講座

【漢詩紀行講座】
2月4日（土）　9時30分～
【古文書講座】
2月11日（土）　10時～
【古典かな講座】
2月18日（土）　9時30分～
【みやこ学講座】
2月25日（土）　10時～

※日程等変更となる場合があります。
※見学会等は別途通知します。

博物館で「楽習」始めませんか？

博物館は郷土資料と学芸員らのサポートによる知と学びの拠点です。以下の会や講座を利用して楽しく学びませんか？詳しくは博物館へお問合せ下さい！

★博物館友の会
バスハイク・歴史たんけんウォーク等の学びの旅やイベントに参加できます。

★文化遺産ボランティア豊み隊！養成講座
町の宝を三つのアクション＝①ガイド（案内）②ガード（管理）③ワーク（調査）でサポートするスタッフを募集・養成する講座です。

開催中止等決定イベントについて

博物館や文化係が所管・支援する文化事業のうち、以下の事業について中止が決定しましたのでお知らせいたします。

なお、不明・不詳の点等についての問合せは博物館（☎33-4666）までお願い致します。

■みやこ町三重塔まつり
2月26日（日）開催予定を「中止」

12月の業務日誌から

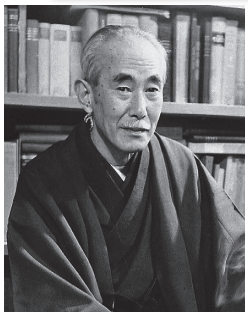
12月9日（金）、地域づくりネットワーク福岡県協議会の京築ブロック会議が館内研修室で行われました。京築の神楽と修験を活かしたにぎわいづくりをテーマに、参加者間で活発な意見交換が行われました。

▲会議では京築エコミュージアムの日の提案も行われました

12月17日（土）、館内ホールを会場に育徳館高校管弦楽部の皆さんによるクリスマスコンサートが開かれました。同校科学部実験ショーのアトラクションでしたが、来場者は名演奏にひと時酔いしれました。

▲ホールは壁材が反射板となって絶妙な演奏を堪能できました

みやこの歴史発見伝 154
明治の二大文豪を支えたみやこ町の偉人④


小宮豊隆（1884～1966）

「食」の作家、夏目漱石

冬の寒い日に食べる「鍋」は、体も心も温まる料理ですが、特に「すきやき」は、日本の鍋料理の中でも子どもから大人まで人気が高いものです。この名前は一説に牛馬で田畑を耕す農具「鋤」の鉄板部を使った江戸時代の鉄板料理「鋤焼き」に由来するともいわれています。明治時代は現在と異なり、味噌味で「牛鍋」と呼ばれていました。森鷗外と並ぶ明治の文豪、夏目漱石の好物料理の一つがこの牛鍋で、彼が鏡子夫人に「旨い」と褒めると、その後夫人は10日続けて牛鍋を出したというエピソードが残されています。夏目漱石はその生涯を通じて食べ物や料理に特に強い関心を抱いた「国内初の職業作家」ともいわれ、彼が約11年の間に執筆した作品には200種に及ぶ料理や食品を登場させています。それまでの文学作品では「食生活」を描いた作品がごく僅かであったことから、日本ではじめて積極的に「食」を描いた作家という評価もみられます。これらの作品に比例するように漱石は食欲旺盛でしたが、その反面、胃腸が弱く食後の胃薬が欠かせなかったと伝えられています。今回は、みやこ町出身のドイツ文学者「小宮豊隆」が仕えた明治の文豪、夏目漱石の食にまつわる物語をご紹介します。

夏目漱石肖像
（みやこ町歴史民俗博物館蔵）

「カレーライス」と「ビスケット」

夏目漱石は慶応3年（1867）に誕生しますが、この翌年に明治維新を迎え、これ以降、日本の食文化は急速な西洋化が進み、歴史的な一大変革をもたらすことになります。明治33年（1900）33歳の漱石は、2年間イギリスに留学します。しかし出航直後から腹痛に悩まされ、寄港した際に出された「ライスカレ（原文）」以外は口に合わなかったと伝えられています。ロンドン到着後の日記にも「下宿ノ飯ハ頗ルマズイ（原文）」という記載もみられるなど食文化や味付けの違いと併せ胃腸が弱かった彼は帰国するまでイギリス料理を受け入れることに苦労しています。またイギリスから夫人に宛てた手紙では「そばと白米が食べたい」と日本食を懐かしがっています。しかしビスケットだけは彼の大好物であったとみられ「昼食代わりにビスケットをかじる」などの記述があり、漱石自身も「食べ出したら止まらない」ことを自覚する程、好んで食べていたものとみられています。また帰国後の漱石の記録をみると、朝食はパンと紅茶（森鷗外はコーヒー）で、さらに3時のティータイムを好むなど、意外にも英国風の食事スタイルを取り入れており、これが漱石のその後の食生活の基礎となります。

やっぱり「偉人はスイーツ好き」

帰国後の漱石の日記をみると落雁、饅頭、おはぎ、チョコレートなど料理以上に数多くスイーツがみられます。また子どもたちと一緒にジャムを一月に8缶（当時の価格で6円分：現在の貨幣価値で約2万円に該当）嘗め尽くすなど、森鷗外や吉田増蔵のように自他ともに認める「スイーツ好き」であったことから、漱石のもとには弟子や関係者から数多くのスイーツが届けられ、また漱石もその相手に大変丁寧なお礼状を送っています。みやこ町出身の小宮豊隆も羊羹やビスケットなどを持参したことが確認できます。

「木曜会」の料理

夏目漱石が、自宅でその門下生を中心として毎週木曜日に開催した会合が「木曜会」です。みやこ町出身の小宮豊隆は初回から漱石が亡くなった大正5年（1916）の最後の会まで皆勤だったと伝えられています。彼の他にも高浜虚子、内田百閒、寺田寅彦、芥川龍之介などが集ったこの会では、先月ご紹介した森鷗外の「観潮楼歌会」と同様に、冒頭の牛鍋やメンチボール（ハンバーグに似たもの）等が出されていたことが確認できます。鷗外に比べると「こってり系」メニューですが、いずれも漱石の好物であることが分かります。

最後の食事は「アイスクリームとワイン」？

3歳で天然痘を発症し、これ以降、腹膜炎、肺結核、心の病、胃潰瘍、糖尿病など多数の病に悩まされた漱石ですが、健康維持のためボート、水泳、野球、体操、自転車をはじめ、当時最新の「筋トレ」などに挑戦しています。さらに「猫」による「アニマルセラピー」も心の健康の回復に大きな効果をもたらしています。しかし明治43年（1910）43歳のときに胃潰瘍のため療養していた伊豆修善寺温泉で大量吐血し一時危篤状態に陥ります。九死に一生を得た後、絶食となった漱石ですが、その後食べた「おかゆ」の味に感動し「腸に春滴るや粥の味」という句を詠んでいます。この時にはアイスクリームを2匙食べていますが「もう1匙」と、鏡子夫人にせがむ様子も記録されています。また8月27日と9月13日には小宮豊隆がビスケットを持参して「お見舞い」に訪れており、漱石も「旨いから嬉しい」と喜んでいます。その後、漱石は奇跡的な回復を遂げますが、その6年後の大正5年（1916）11月21日に胃潰瘍が再発し入院します。これ以降、漱石が口にしたのは薬とアイスクリームのみでした。12月9日に目を開いた漱石は「何か食いたい」と訴えます。医者の計らいで1匙の葡萄酒を口に含んだ漱石は「うまい！」という最後の一言を残し、その後再び彼の目が開かれることはありませんでした。最後の瞬間まで「食」に執着する姿勢を貫いた49歳の生涯であったことが伺えます。

（井上信隆）